

古代の先進地域

秦の歴史遺産から見えてくるもの



石畳神社の磐座

秦歴史遺産保存協議会

古代の先進地域 秦の歴史遺産から見えるもの



一丁坑古墳群33基のうち1号墳（前方後方墳）



秦原廃寺



秦原廃寺から出土の
南門門柱 高野槨
(埋蔵文化財学習の館)



新たに発見された茶臼嶽古墳（前方後方墳）



麻佐岐神社 磐座



石置神社 磐座



姫社神社



昭和27年湛井堰の築造風景

秦歴史遺産保存協議会

はじめに

この小冊子は、総社市秦の歴史遺産をテーマに、大学の歴史学者、考古学者をはじめとする専門的知識を有する方々や秦歴史遺産に関心のある関係各位に執筆をお願いし、編集したものです。

一丁圪古墳群33基及び茶臼嶽古墳の発見を契機とした秦の歴史遺産については、近年、古墳群の調査等に取り組む総社市教育委員会を始め、多くの考古学者や歴史ファンの関心を集めており、現地を見学に訪れる者も毎年増えております。

秦歴史遺産保存協議会では、現地の案内看板やパンフレットの作成、散策道の下刈り・清掃などに努めるとともに、総社市との協働のもと、秦の60基を超える古墳群の実態や多くの神社、寺、城跡等について調査研究を続けるとともに情報発信をしており、その活動の一環として、このたび小冊子「古代の先進地域、秦の歴史遺産から見えてくるもの」を発行することとなりました。

秦の歴史遺産や渡来人秦氏の実態が現在においても謎の部分や未解明の部分が多く、それだけに多くのロマンを秘めています。今後の古墳の発掘や新たな調査研究によって吉備の古代史が書き換わる可能性も予測され、史実が確定していない流動的な中ゆえに、執筆者の方々にはコラム、随筆等の形で投稿いただきました。パンフレットや由緒版では説明できない部分にも言及していただき、今後の秦歴史遺産協議会の活動に大きな歴史のロマンを与えていただいたと思っております。

執筆いただきました方々に熱く御礼申し上げるとともに、今後とも読者の方々のご批判、ご助言を賜りますようお願いし、かつ、今後の古墳群の発掘調査等による新事実を踏まえ、再度修正版も発行できればと思っております。

2015年1月

秦歴史遺産保存協議会会長 板野 忠司

目 次

	ページ
一丁埜古墳群について……………岡山大学大学院社会文化科学研究科教授 新納 泉	1
大型古墳が築かれた山！秦の古墳群調査…総社市教育委員会文化課長 谷山 雅彦	3
秦原廃寺（秦廃寺）……………総社市埋蔵文化財学習の館 館長 平井 典子	5
「謎の秦氏と吉備国」その後 ……………岡山郷土歴史文化研究会代表 山田 良三	7
総社のハタ氏……………星と太陽の会・古代吉備国を語る会 佐藤 光範	13
古代日本巨石文明熟成の地か？…磐座(いわくら)学会会員・精神科医 高木 寛治	18
福谷の「姫社神社」について……………姫社神社総代 板野 勲	21
随想「湛井堰と秦氏？」……………秦歴史遺産保存協議会会長 板野 忠司	24



(一丁埜古墳群の入口に設置された歓迎用看板)

一丁垆古墳群について

岡山大学大学院社会文化科学研究科教授 新納 泉

方丘を選ぶか円丘を選ぶかは、古墳時代の人びとにとって重大な問題であった。「天円地方」という言葉もあるように、亡骸を「方の世界」に送るのか、「円の世界」に納めるかは、思想の根本にかかわることだった。その両者のせめぎ合いが、古墳時代の社会の底流に存在していたのではないかと思う。

一丁垆1号墳が70mを超える前方後方墳であることを聞いて、非常に驚いた。岡山県の南部は、もう少し小さい前方後方墳しか分布しない地域だと思っていたからだ。そして、周辺の尾根に、ほかにも方墳が多数築かれていることを知り、さらに驚くこととなった。それだけでなく、7世紀には外護列石をもつと推定される「終末期」の方墳である15号墳まで築かれている。古墳時代を通じて、ここが「方丘の尾根」となっていたのである。こんなところは、西日本を見渡しても稀なのではないか、と。

そして、新たに前方後方墳である茶臼嶽古墳が確認された。墳丘長65mもの古墳がまだ眠っていたことには、ただ驚くほかに、発見に尽力された地域の方々にお礼を申し上げたいと思う。茶臼嶽古墳の墳形は、一丁垆1号墳とよく似ている。後方部がやや長い感じであるのも共通している。一丁垆古墳に近い時期に築かれたのだろうが、残念ながらまだ年代を決定できる資料が確認されていない。

もちろん、この地域が方丘一色なのではない。丘陵の南には前方後円墳の秦大垆古墳があり、時期も一丁垆1号墳にきわめて近いと推定されている。また、一丁垆古墳群のなかにも円墳が存在していないわけではない。しかし、単純に円丘が混在しているとして終わらせるのではなく、もう少し可能性を検討してみる必要がある。

出雲などの日本海側の地域から東海地方などに、方丘優位の地域が広がっており、吉備や播磨などにもそれはのびてきている。古墳時代の初期には前方後方墳が採用された地域が多いが、まもなく円丘系の墓に置きかえられていく。それでも、すぐに置きかえられる地域と、長く残る地域とがある。出雲などは、もちろん長く残る地域だ。そして、巨大古墳が築かれる5世紀になると、方丘の影は非常に薄くなってしまう。

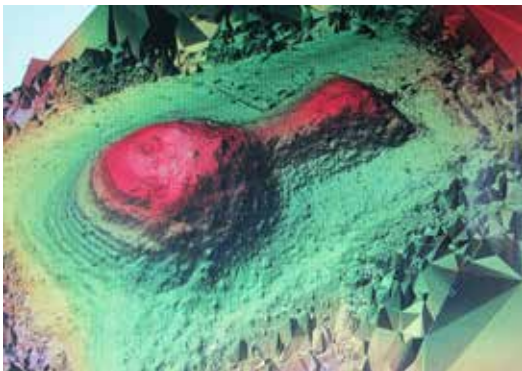
しかし、5世紀の後半になって、巨大な前方後円墳の築造が下火になるころ、各地でまた方丘系の古墳の築造が広がり始めるようだ。6世紀の後半になると出雲では大規模な前方後方墳が築かれる地域がみられ、畿内でもやや大型の古墳で方墳が取り入れられる例があり、やがて大王墓にも方墳が採用される。一時は息をひそめていたようにみえる方丘が、再び表舞台に登場してくるのである。

各地域での前方後方墳と前方後円墳の分布を細かく見てみると、両者の分布に何かしらの距離を感じることがある。出雲の東部では、飯梨川を境に東は前方後円墳で西は前方後

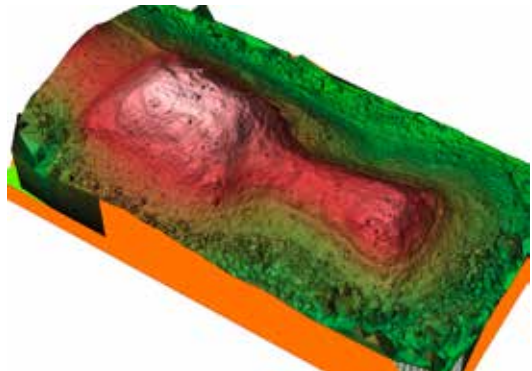
方墳と、住み分けるように分布している。それほどはっきりしていない場合でも、古墳時代の初期に前方後方墳を築造した地域で、その後に前方後円墳をつくるのは、少し場所が違っている例が少なくない。非常に細かい地域単位で見えていくと、場所が移っていると思われるのだ。

一丁埴古墳群の周辺でも、同じようなことが読み取れるかもしれない。一丁埴古墳群を築いていたのは、東側のふもとの勢力であり、秦大埴古墳などの円丘系の墓を築いたのは、南側の平野を基盤とする勢力であったのだろうか。そう考えると、次に気になるのは、一丁埴古墳群のなかの円墳が築かれた時期だ。そこまで明らかになってくると、この地域が古墳時代の「もうひとつの勢力」の歴史の箱庭のような役割を果たすことになると思う。そのためにも、今後の調査が進んでいくことを期待したい。

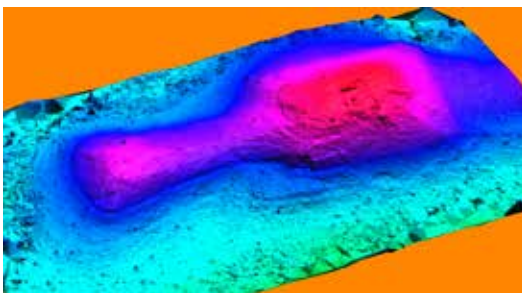
高梁川の西側は、歴史的におもしろい働きをする地域だ。いま気になっているのは、矢掛町の小迫大塚古墳。一辺23～27mの方墳ということであり、7世紀の「終末期古墳」としては、岡山県下で最大級となるのではないと思う。総社市久代の長砂2号墳も石棺式石室で珍しい。6世紀から7世紀にかけて、対外的な交渉の担い手として、高梁川の西側の地域が、進取の気風に富んだ役割を果たしたのではないと思う。秦廃寺や吉備真備も念頭に置きながら、この地域の個性がさらに解き明かされていくことを期待したいと思う。



秦大埴古墳 3D画像（3次元デジタル画像）
岡山大学 新納教授より
〔前方後円墳〕63m(全長)×30m(後円部直径)



茶臼嶽古墳 3D画像（3次元デジタル画像）
岡山大学 新納教授より
〔前方後方墳〕65m(全長)



一丁埴1号墳 3D画像（3次元デジタル画像）
岡山大学 新納教授より
〔前方後方墳〕70m(全長)

大型古墳が築かれた山！秦の古墳調査

総社市教育委員会文化課長 谷山 雅彦

総社市内には数多くの古墳が存在します。とくに6世紀から7世紀にかけて、市内の低丘陵を中心に築かれます。このことは、この時代になると多くの人が古墳を築けるようになったことを示しています。

では、それ以前の古墳はどうであったのでしょうか。総社市で最大の古墳である作山古墳は5世紀中ごろの古墳と考えられ、全長は282mあり王陵と競っています。

この時期の古墳は規模が大きく、その数はそれほど多くはありません。

秦の古墳については、全長63mの前方後円墳である秦大圪古墳や三角縁神獣鏡が出土した秦上沼古墳が知られ、時代が下ると家型石棺を納めた横穴式石室をもつ石塔塚古墳が著名でした。

秦大圪古墳が所在する丘陵には金子古墳群が築かれていることは知られていましたが、さらに丘陵を登った中世山城である荒平山城までは、古墳分布の詳細が不明でした。この不明であった丘陵部分で多くの古墳が確認されました。

特に注目されるのが古墳群の中心にある一丁圪1号墳です。この古墳は全長が約70mあり、形が前方後方墳と県南では数少ない形の古墳でした。形と大きさ、さらに埴輪から4世紀前半に遡る古い古墳であることがこの古墳の重要性を高めています。

秦に築かれたこれらの大型古墳にはどのような人物が葬られているのでしょうか。さらに周辺に築かれた小型の古墳との関係はあるのでしょうか。こうした多くの謎も新たに出てきました。秦で現在進めている古墳の調査はこうした謎を解明する手がかりを少しずつ教えてくれています。

古墳測量調査ではどの場所に、どれくらいの古墳が所在し、その古墳ごとの大きさと形の概略を知ることができます。丘陵上には円墳・方墳あわせて約30基以上が確認されました。この成果をうけて古墳群の内容については、これから検討していかなければなりません。そのための、調査成果の整理をおこない、正しい内容で公開することで多くの人が資料として利用できることがまず必要と考えています。

また確認調査では古墳から埴輪などの遺物が出土しています。遺物は古墳の謎を解明する手がかりになります。遺物の整理をおこない報告書の刊行にむけて作業を進めています。将来この遺物（埴輪）は私たちに多くの情報を与えてくれるものと考えています。また秦大圪古墳からも測量調査時に埴輪が見つかりました。このことで、秦の大型古墳の謎がまた増えそうです。それは、この埴輪が一丁圪1号墳の埴輪に比べ古い可能性があることです。秦で最初に築かれた大型古墳はどれなのでしょう。

またその古墳はどのような意味をもつのでしょうか。今判っているのは、新本川流域で

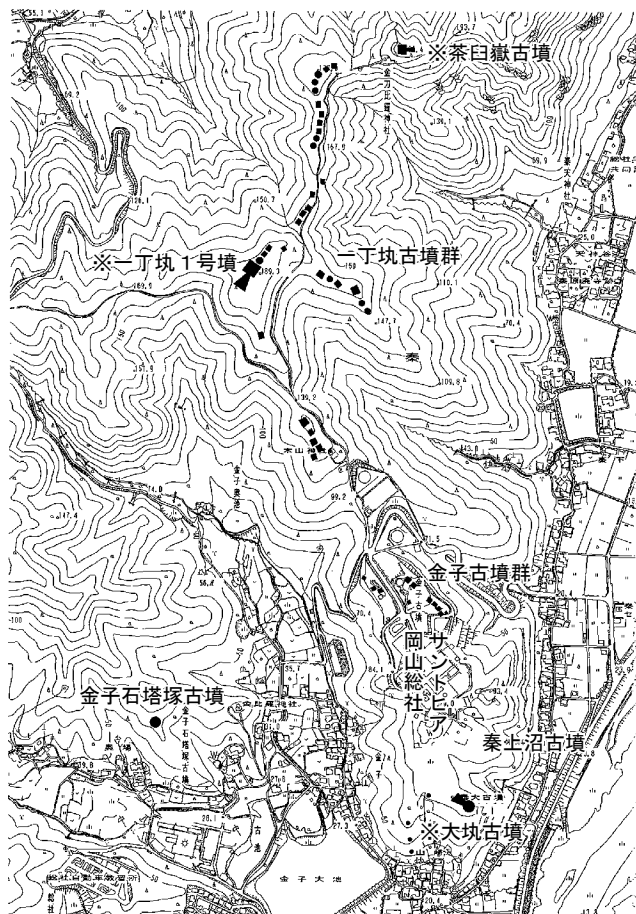
は一丁坑1号墳の全長約70mを超える大型古墳は存在しないこと。1号墳と相前後して秦大坑古墳が築かれたこと。共に古い埴輪をもち、50mを超える大型古墳が同一丘陵に築かれたこと、などです。

さらに、新たな古墳が発見され平成26年11月に実施した茶臼嶽の測量調査で全長約65mを測る前方後方墳が確認されました。大型古墳が3基になりました。いずれも4世紀代の築造と考えられています。

その後5世紀になって、一丁坑1号墳を中心に小型の古墳が尾根上に築かれていくようです。長い期間この丘陵は古墳を築く場所として位置づけられたようです。

多くの発見と謎があるこの古墳群は総社市のみならず、古墳時代を考えるうえでも重要な遺跡といえます。さらなる解明のための努力が必要と考えています。

※ここでは、大型古墳は50m以上の古墳としています。



秦原廃寺（秦廃寺）

総社市埋蔵文化財学習の館 館長 平井 典子

秦原廃寺は、『和名類聚抄』【承平年間（931－938）に成立】にいう、備中国下道郡秦原郷に属します。

寺跡は、高梁川西岸の低い台地上に位置し、出土した瓦から飛鳥時代に創建された、県下最古の寺院跡と考えられています。

寺域については、東を切断して整えた台地の端部、西を山際付近と捉え、東西一町（108m）と想定されています。南は、南門基壇の可能性のある張り出し状の地形と、台地下の水田から南門の柱と考えられる高野槇製の巨木が出土したことから、この付近を南限としています。北については、南北一町半説もありますが、葛原克人氏は切絵図の「土井」という小字名が、築地をめぐらした土地の形状をあらわす可能性を考え、この範囲を捉えて南北も一町とし、一町四方の寺域を想定されました（葛原1987）。

寺域推定地内の東南よりには、花崗岩製の塔心礎および礎石が一箇所にとめられ、石仏などの台座となっています。塔心礎は、礎石の上面に一辺約125cmの方形台座を造り出し、その中央に径約45cm、深さ約33cmを測る円形の穴を穿ったもので、県下では他に例がないものです。また秦原廃寺に使用された礎石は、上面に底径約60～70cm、上面径約50～65cmの円座を作り出し、そのいくつかには、中央に10数cmの柄穴を穿った稀少なものも見受けられます。

この塔心礎は、以前は原位置が保たれているものと考えられていました。しかし1995（平成7）年度の総社市教育委員会による確認調査で、南側から塔心礎の南端までトレンチを入れましたが、塔基壇の版築層は認められず、土壌の上に据えられていることが判明し、移動されているものと判断されました。そのほか、回廊と想定される石列などは確認されたものの、原位置を保つ建物が不明であることから、伽藍配置（塔や金堂などの寺を構成する主要な建物の配置）を推定することは困難です。

秦原廃寺は、出土した単弁8弁蓮華文軒丸瓦から7世紀第2四半期頃の創建と考えられています。この飛鳥時代前期の軒丸瓦の他に、飛鳥時代後期（白鳳時代）の吉備寺式（備中式）軒丸瓦などを含め平安前期までの瓦が出土しています。この他にも室町時代の巴文瓦などが採集されており、寺の規模は縮小されながらも、室町時代までは存続していたものと推定されています。

さて、この寺の建立者ではありますが、吉備の中心的な豪族とする説と、『和名類聚抄』の秦原郷という地名を重視し、渡来系氏族の秦氏とする説があります。

前者は、寺院建立には、各種の生産体制を整備・掌握する必要があることから、それまでの吉備の中心的な豪族が、新しい技術を導入して建立したものであるとしています。

これに対し後者の立場をとる葛原克人氏は、新本川流域における4世紀代以降の朝鮮半島系遺物の出土や、埋葬の風習などの違いから、渡来系集団がこの地に居住区を得た可能性を説いています。いずれであるかは今後の課題ですが、2012（平成24）年に発掘調査された山田地区狩谷遺跡の古墳群においても、他の地域に比べ、墳丘は小さいながらも豊富な副葬品をもち、朝鮮半島系の遺物もみられることから、高梁川以西に渡来系集団の本拠地があった可能性は、あながち否定できないものと考えます。

なお、1995（平成7）年の秦原廃寺確認調査時に、地元の方から瓦が出土したとの報告があった天神社境内の確認調査も実施しており、瓦窯跡1基を発見しています。この窯跡からは、丸瓦・平瓦の他、秦原廃寺においても出土している吉備寺式（備中式）の軒丸瓦片が確認されています。この瓦窯から秦廃寺へ瓦が供給されていたことを物語るものです。

参考文献

- 高橋美久二 1986「飛鳥・奈良時代」『図説発掘が語る日本史』第5巻中国・四国編巻
総社市史編さん委員会 1987『総社市史 考古資料編』
葛原克人 1995「備中秦氏の造寺活動について」『日本古代国家の展開』下巻
谷山雅彦 1996「秦（秦原）廃寺確認調査」『総社市埋蔵文化財調査年報』6
谷山雅彦 1997「秦（秦原）廃寺確認調査2」『総社市埋蔵文化財調査年報』7



秦廃寺 塔心礎
(秦原廃寺の現地)



飛鳥時代の瓦
(倉敷市教育委員会蔵)

「謎の秦氏と吉備国」その後

岡山郷土歴史文化研究会代表 山田 良三

平成25年度の秦歴史遺産保存協議会の第二回の総会で「秦氏の謎と吉備国」のテーマで講演させてもらった。歴史の専門家でもない自分がそういう場にふさわしい話をできるかどうか案じていたが、皆さん熱心に話を聞いてくださりとても感謝している。秦地区には以前から歴史探訪会の仲間たちと何度か行かせていただいていたが、行くたびに案内看板が整備されていたり、通路が整備されていたり、地区の皆さんが歴史遺産を大切にされ、保存に尽力されている姿にとっても感動させられている。秦歴史遺産保存協議会の活動が発展することを願っている。

秦氏への関心

ふとしたきっかけで日本の代表的な宗教家の歩みを学ぶようになった。

私が秦氏や秦の地区に関心を持つようになった経過を少し紹介したい。私の生まれは児島の瑜伽山蓮台寺にほど近い村里で、生家は蓮台寺の檀家だった。歩いて30分くらいの蓮台寺や神社には小学校のころは時々友達と遊びに行った。中学、高校と進み児島高校から鳥取大学に進んだ。

この頃大学は全国どこでも70年安保の激しい紛争の最中、大学も休学になったりしていたので、人生勉強だと人の話を聞くのが好きでいろんなところに顔を出した。当時はマルキストが全盛の時代だったが、私はどちらかというと精神文化的な話が好きで、お寺の住職や儒学、キリスト教といろんなことに関心を持ち勉強してみた。

その後25歳の時、栃木県の宇都宮に行った。この頃も、政治家、宗教家、教育者、その他、時代や世界を語れる人のもとを訪ねては熱心に勉強した。32歳の時に仙台に行った。東北で10年暮らした。関東や東北は人の人情も違い、最初は戸惑ったが、住み慣れるとその人情の深さに去りがたくなるものである。

東北時代のうち約1年間は福島県で暮らした。昨年大河ドラマで話題になった会津に半年、県庁所在地の福島に約半年いた。会津の気風は東北の中でも独特で、その気概と精神は「八重の桜」でもよく表現されていたとおりである。また、東日本大震災で津波の被害を受けた地域や原発事故のあった地域は福島在住時代もそのあともよく行ったところで、大震災発生時には知り合った人達らの消息が本当に心配で仕方が無かった。

東北にいた頃は知人に誘われて各地の神社仏閣を尋ねたり、いろいろ勉強したが、中でも日本の各宗派の開祖の伝記などを熱心に勉強する中に、岡山にゆかりの法然や栄西も含まれていたのが郷土岡山の歴史に対する興味が俄然湧いてきたものである。

岡山も人物の宝庫だが、東北も優秀な人物をたくさん輩出している。米沢藩の上杉鷹山

などはその中でも代表的人物で、米沢の町にも行った。岩手県盛岡市には「先人記念館」という施設があり、明治期以降に活躍した岩手県出身の偉人130人の業績が展示されている。岩手県には新渡戸稲造や宮沢賢治など全国的にも知られる著名な人物をたくさん輩出している。

このような中に平成3年に故郷の岡山に帰って来た。ちょうどこの頃山陽新聞に「ゆかりの地を訪ねて」というシリーズの連載があり、かねてから興味のある人物「法然」や「栄西」、「弘法大師」、「和気清麻呂」など記事を読んで、自分も行ってみたいくなり、比叡山や高野山、京都や奈良・飛鳥などを時には仲間と連れ立って、あるいは一人で訪問した。

このような中で日本の歴史に大きく関与した郷土の人物や、それらの人物を生み出した郷土の風土にとっても興味が沸いてきた。

このころ知人の方からある宗教家の方が岡山に行くので案内して欲しいと頼まれて、岡山県内を案内したことがある。その方というのが澤田沙葉先生である。

この方が私が秦氏に特に関心を持つようになったきっかけを作ってくれた。澤田沙葉師は昭和25年東大法学部政治学科卒業、戦後日本の混乱期にあって、日本の再建と世界平和のためには宗教が必要だと考え宗教界に飛び込み、数度にわたる21日間や40日間の断食や滝行など経験、神道の秘伝を継承、「竹内文書」の調査研究に取り組むなど学術文化に貢献、さらにはキリスト教民主同盟の日本代表を務め毎年ローマの会議に参加、またメッカの大巡礼に三度参加、この時澤田先生を案内して行ったのが最上稲荷と由加山であった。まず行ったのが最上稲荷で、行くと早速「巨岩があるはずだが？」と聞かれ、最上稲荷の磐座を案内した。由加山では由加神社本拝殿裏側の磐座を宮司自ら案内してくれた。この時に澤田先生から「秦氏と稲荷」、「稲荷と磐座や弥勒信仰との関わり」を教えていただき、「秦氏と稲荷のくしびな関係」さらに「吉備と秦氏」の関係に深い興味と関心を持たせられた。

平成18年ころ歴史好きな仲間と「史跡巡りの会を組織したらどうか」と言われて設立したのが「吉備歴史探訪会」である。この会で最初に行ったのが和気清麻呂ゆかりの和気神社で、その後県内各地の史跡を訪ねたり、一緒に勉強会を持ったりしてきた。歴史講演会を開こうということになり、就実大の柴田一先生に講師をお願いをしてお話をいただいた。この時「岡山人物銘々伝を語る会」の黒田輝一さんが来られていて、「銘々伝を語る会」にお誘いを受けた。興味のある内容だったので何回か参加するうちに「山田さんも何か話をしてください」と言われて話をするようになった。その時のテーマが「法然上人」である。

この時話の題材としてとても参考になったのがそのころちょうど出版された「法然と秦氏」という本だった。著者の山田繁夫氏は元中外日報の記者時代「法然」を執筆した梅原猛氏の担当だったことから法然に関心を持ち、それが動機でこの本を書いたと言われる。この山田氏の著作の中では当然ながら法然と秦氏の結びつきがとても興味深かった。

法然と秦氏との関係がきっかけで「吉備の秦氏」に関心を持ち「岡山人物銘々伝を語る会」で「吉備の秦氏と岡山の人物」の話をさせてもらうこととなった。またこの会で栄西

禅師や寂室元光禅師の話も取り上げた。

「秦歴史遺産保存協議会」の皆さんとのご縁は、この「人物銘々伝を語る会」で同じく講師を担当されていた高橋義雄さんからの紹介による。高橋氏は中国銀行の社史を編纂され、また山田方谷や三島中洲などにも詳しく「銘々伝を語る会」で講師をされていた。秦歴史遺産保存協議会会長の板野忠司さんにお会いしてお話をするうちに「秦」の歴史遺産に対する情熱や取り組みをお聞きして「自分でもよければ」と講話を引受させていただいた。実は話をさせていただいた前年、平成24年、「秦歴史遺産保存協議会」の第一回総会の行われた当日に「吉備歴史探訪会」で一丁埴古墳やその他の遺跡を訪ねて来訪させていただいたのである。探訪会の仲間と雨の降る中、一丁埴古墳に登り、秦廃寺や石畳神社を廻ったあと、福谷の姫社神社を訪れた。神社総代の板野勲さんから姫社神社の由緒などの話をみんなでお聞きしたあと、「今日は地区の遺跡保存会の会がある」とお聞きしていた。まさかその翌年に私が話をさせてもらうことになるとはである。

その第2回の総会の時のテーマが「謎の秦氏」である。「秦氏」のルーツや文化など秦氏に関する概論に加え岡山の各地にある秦氏に関する史跡や人物などについて話をさせてもらった。

「秦氏の謎」？

秦氏については古事記や日本書紀にも秦氏に関する記事があるが、平安初期（815年～弘仁6年）に編纂された新撰姓氏録の記事が最も具体的である。新撰姓氏録には、当時の平安京とその周辺の諸姓氏の調査の結果が記されているが、その中でも諸蕃（渡来系の姓氏）の中でも秦氏が最大の勢力を持っていたことがよくわかる。

「秦始皇帝13世孫孝武王の子孫とする功満王が来朝」との記載がある。

仲哀天皇八年、功満王来朝。（左京、太秦公宿禰の条）
応神天皇十四年、融通王（一名 弓月王）百二十七郡の百姓を率いて帰化。（左京、太秦公宿禰の条）
応神天皇十四年、功智王・弓月王来朝・上表。更に帰国し、百二十七郡の百姓を率いて帰化。
（山城国、秦忌寸の条）

山背の秦氏については京都大学名誉教授の上田正昭氏が自ら著述されたり、監修した本が数多く出版されていて、山背の秦氏については研究が進んでいる。

それらを参考にすると、秦氏は諸蕃（渡来系の氏族）のほぼ三分の一を占める多数を占めていて、最大の渡来系氏族であった。平安京の大内裏はもとは秦河勝邸だった。秦氏一族が葛野の大堰を作ったり地域の開発に著しく貢献した。伏見稻荷、松尾大社は秦氏の氏神として知られ、加茂神社も深い関わりがある。平安京は現在の西京区のあたりはほぼ100%、渡月橋あたりでも70%が渡来人であった。等々の記事がある。

また、聖徳太子の側近の秦河勝が百済からもたらされたという、太秦の広隆寺の弥勒菩薩像は国宝第一号に指定されていて、余りにも有名である。

秦氏に関しては実に多様な研究者が様々な角度から研究をしていて、出版されている書籍の数も多い。中でも私が一番参考にさせてもらったのが、大和書房の創業者大和岩雄氏の書いた「秦氏の研究」である。第2回の総会の時の講演の資料としても活用させてもらった。総ページ数600ページを越えるかなりの大書である。

さて昨年その続編が出版されたので早速手に入れて読んでいます。続編では「秦人」あるいは「秦の民」に関することが多く著述されている。これまで「秦氏」に関する数多くの書籍が出されているが「秦人」あるいは「秦の民」に関する著述をした本はあまり見受けられない。「秦氏」と言うのは「秦の民を率いたリーダー層」であり、「秦人」あるいは「秦の民」とは率いられてきた民人のことである。

この民人の観点での研究は「秦氏」に関する新しい発見を与えてくれた。

この「続 秦氏の研究」の紹介の一文がこれである。

「秦人・秦の民とはどのような人々か？八幡・稲荷・白山信仰に関わり、優れた「鍛冶」の技術、芸能・巫覡（ふげき）の技を持ち、古代日本の産業と技術に深く関与した渡来集団の実像に迫る。」

ここで巫覡（ふげき）と言うのは巫のことである。巫女は女性だが、男性の巫を覡と言う。祭祀を司る男女のことである。「秦氏」が実に有能な祭祀集団だったということである。民間信仰の分野で隆盛を極めたのが八幡社と稲荷社であるが、いずれも秦氏に縁の神社である。八幡社は大分県の宇佐神宮が総本社で、全国に4万4千、稲荷宮は伏見稲荷大社が総本社で全国に4万の神社がある。その他秦氏に縁があるとされる神社や寺院は数え切れない程である。

そして比叡山を開いた最澄や、真言密教を招来した空海も秦氏との関わりが強い。特に空海は誕生の地、讃岐の金比羅と秦氏との関わりや、虚空蔵求聞持法を教えた師勤操が秦氏であることの他、唐への渡航や帰国後の歩みにも関わりが濃密である。それは空海が開いた東寺の鎮守として稲荷社と八幡社が鎮座していることにも象徴される。

鎌倉仏教を代表する浄土宗の開祖法然上人が秦氏である。その母親が「秦氏の君」であり美作の秦氏の長者の娘とされるが、父親の漆間時国も同族とされる豪農立石家とともに先祖は宇佐八幡の神官家のひとつ辛嶋家に由来する。そして生涯の歩みの中でも秦氏や秦の民との密接な関わりがある。

秦氏のもうひとつの顕著な特徴が産業や技術の分野における優れた能力である。秦氏は鉄や銅などの金属加工の技術に優れ、渡来した各地で金属加工の鍛冶場を形成した。秦氏渡来の伝承地は鉄や銅の金属加工の遺跡が多い。

総社市秦地区にも鉄産の祖としてヒメコソを祀る姫社神社があって、かつてこの地が鉄産の地だったことが偲ばれるが、吉備では備前や美作方面でも秦氏と金属加工の遺跡が密接に繋り残存している。

秦氏は蚕の栽培と絹織物の加工にも優れていた。絹布を織る「機織り機（はたおり）」の由来や、服部や錦織の地名や姓は秦氏に由来している。法然上人誕生の地にほど近い久米郡美咲町錦織には「錦織神社」があるが、ここは秦氏による養蚕と絹織りの伝承がある。神仏混淆の時代に密接な関係のあった両山寺は白山信仰の開祖秦氏の僧侶泰澄とされる。

さて、秦地区には正木山に麻佐岐神社がある。この神社の本殿は巨岩=磐座である。麻佐岐神社の鎮座する正木山に登ると吉備の平原のすべてが見渡せる。この麻佐岐神社への参道の途中にあるのが発見された「一丁坵古墳」をはじめとする古墳群である。一丁坵古墳は前方後方墳で全長70メートル、この時代の前方後方墳としては全国的にも最大級である。

前方後方墳ということで私は出雲の方墳を思い起こした。「出雲とのつながりがあるのでは？」姫社神社に祀られる「ヒメコソ」は天日槍の妻「アカルヒメ」であるとされる。天日槍は新羅の王子とされる。新羅はいわゆる三韓三国時代の「秦韓」（あるいは辰韓）12カ国の一つで、その後勃興して半島全域を支配するまでになった。秦氏はこの「秦韓（辰韓）」から来ている。天日槍は素戔鳴尊のルーツとも重なり、さらには古代の祭祀氏族である物部氏のルーツとも重なってくる。備前一宮の石上布津魂神社は記紀（古事記・日本書紀）にある「素戔鳴尊の大蛇退治の剣」が納められたという神社である。出雲と吉備はそのような観点からも密接なつながりがあったのではなかろうかと現在考察中である。

さて、「秦氏の研究」の中にこのような著述がある。

京都女子大教授の平野邦雄先生の研究から引用してある。

「香春神は新羅国神で秦氏に祭祀された銅産神であった」（平野邦雄）

「香春神社の神官三家のうち二家の赤染氏は、秦氏系である。」

「播磨風土記によれば、天日槍の説話を有する地域と秦氏の居住区はほぼ完全に重複し」「喜田貞吉氏が、天日槍をもって、秦氏族最初の日本移住者とされたのは鋭い指摘である」（平野邦雄）

福谷の姫社神社の伝承は天日槍の伝承であり、まさに秦氏の歴史と重なるのではと見ている。

天日槍の伝承というと、備前を平定した戦国武将の宇喜多家には新羅王子天日槍の末裔との伝承がある。讃岐の善通寺神恵院に伝わる「弘化録」という記録の中に「宇喜多の本姓は秦氏」と書き込まれた文章がある。（先史古代研究会会長 丸谷憲二氏より）

吉備、岡山の歴史のルーツを訪ねるとそこには秦氏に関する渡来の歴史がその底流にあることがこれらのことを見ても明らかである。

岡山県内には備前、備中、美作の各地に秦氏に関連するとみられる遺跡や地名、伝承が多く残っている。秦氏に関わる地名の研究では浦上宏先生の研究が詳しく、参考にさせていただいた。

私は「岡山人物銘々伝を語る会」の事務局を担当しながら、我らの郷土岡山が生み出し

た数々の偉人や先人の姿を数多く拝見してきたが、人物の多様さを思うにつけ「秦氏」あるいは「秦の民」という渡来の民の吉備国における存在の大きさを実感せざるを得ない。吉備の国に渡来した秦の民の文化が日本の歴史の発展にも大きく寄与していることを見ている。司馬遼太郎の「兜率天の巡礼」という本には「古代の岡山はユダヤの国だった。」との記述があるらしい。

実際には秦地区の「秦」と「秦氏」の「秦」を繋ぐ確たる証拠となるようなものは今のところ出ていないそうである。しかし様々な状況から見て「秦」が「秦氏」と密接な関係を持っていることは想像に難くない。いずれ秦地区の「秦」と秦氏、秦の民の「秦」を繋ぐ有力な証拠が見つかる可能性は十分にある。そのためにも発見された遺跡の数々は大切に保存していかなければならないであろう。県内でも開発の名目で重要な遺跡が破壊された例が数多く存在する。

そう思うと「秦」に関わる遺跡の保存に尽力される「秦歴史遺産保存協議会」の存在の意義はとても大きいと思う。協議会のみなさんのご尽力本当に感謝の気持ちでいっぱいになる。「秦氏」や「秦の民」のことをもっともっと多くの県民や国民に知らせて行くことが、この地に渡来して苦労しながらも地域の文化や産業を創造してきた先祖の苦勞に報いることでもあると実感させられる。

歴史遺産を訪ねて思うこと

秦の遺跡に限らず、歴史的史跡は、古の時代に生きた人々の生き様や、その心の遺跡でもある。古墳は明らかに墳墓である。祖先たちがどのような思いでどのような人物を葬ったのか？その時代に生きた先人たちがどのような思いを持ち、どのような心で墳墓を築きまた、祭祀をしたのか？故人を大切に思い貴く想う心あればこそ築かれた墳墓であり、祭祀や寺院の遺跡である。

そのような心が受け継がれて今日の我々の時代の我々の生活があり、存在がある。私は歴史遺跡が宗教的祭祀の蹟であろうが、様々な産業や文化の史跡であろうが、それらを遺した人々の生き様やその心を思い浮かべるようにしている。遺跡はその時代に生きた人々といまに生きる我々の心を繋ぐ緒であり、また未来につなぐ足掛りでもあると思う。大切にしていきたいものである。

総社のハタ氏

星と太陽の会・古代吉備国を語る会 佐藤 光範

1 当地「秦」の地名

ハタという地名は、総社市秦原だけではない。倭名類聚抄（10世紀に出来た地名帳＝現代の都道府県市町村名一覧帳）には、ハタの発音を含む地名、ハタ〇〇・〇〇ハタと続いている地名も併せて28ヶ所ある。また、字は色々だがハタと読める地名が、郡名では土佐国幡多郡が一つ、郡の下郷名では全国に18郷もある。備中国下道郡秦原郷もその一つである。

地名は、漢字で書いて残っているが、字の無い時からあった地名もある。それを漢字で書くから、地名の由来・地名考が難しい。

昔の日本語（古語）・地名は、当て字の漢字で書いてある場合がある。地名は、字のない弥生時代にも存在していたが、それを字に表記する漢字は、数百年後に確立している。ハタの地名だけでも「幡多」「波多」「覇多」「八田」「秦」と書かれている。そのことは、字から「ハタ」の意味を詮索することは難しい。

「ハタ」の地名考には色々あって、①「機織り」をしていた部族の居た所。②朝鮮語で海を「パタ」「パダ」と云うから海を渡ってきた部族の居た所。（それなら、ハタ・ハダは秦氏ではなく海氏と書いていた筈ではないか）③仁徳天皇に布を献上したら「肌がすべすべする」布だからとて「波多」公を賜った部族、等々。

和銅六年（713年）に地名は「好字二字」で書けと勅令がでた。その時は既に、弥生時代からあったハタの地名の由来は不明になっていた。

当時、ハタ族の居住地は「秦原」と広く一地区だったから、二字の勅令に違反する事はなかったが、現在に至っては原地区が中原・下原と別れている。しかも全国的に「中原」の地名のところにはハタ氏族が居る様に思える。

2 地名考と銅冶金

地名考の難しさは、8世紀、編纂された風土記の地名考を見ても、書いてある「漢字」の意味から地名考を述べているものが多い。例えば、備中風土記逸文には『現在の二万（今の倉敷市真備町二万）は栄えていたので、兵を集めたら直ちに二万の兵が集まった。だから二万と云うが、字を変えて邇摩郷書く』と。高梁川の対岸には備中の国府があるのに、兵を国府でなく一農村に集合させる理由はないだろう。

しかし、「ニマ」だって、地名になるのだからその理由はある。私は「ニマ」の発音は古語で【ニの発音は銅。マの発音も銅】だとしている。二万の山で「くじゃく石」が見つかっている。又、「ニ」の発音で云えば、岡山の安仁（アニ）神社の裏山から「銅鐸」が

出土している。アニとは、【アの発音は冶金する。ニの発音は銅】だからだ。秋田県旧北秋田群阿仁町（現秋田市）には「アニ銅山」がある。マの発音は、愛媛県別子銅山は「宇摩ウマ郡」にある。【ウの発音は生ずる。マの発音は銅】

古語で考えない時は、徳島県を「阿波国」と云ったのを、阿波は「栗」が採れる国だとか、吉備が「黍」が採れる国で、小豆島は「小豆」が採れる島だとの説明をする。間違いもいいところだと思う。

阿波国とは、【アの発音は冶金する。ハの発音は銅】で、出雲国で358本の銅剣や39基の銅鐸が出土・発見されるまでは、阿波国（徳島）が、弥生の青銅器を一番多く出土していた国（県）だった。「ア・ハ」国と呼ばれていた由縁だろう。

現在では、「ハの発音が銅の意味」とは理解できてないが、日本書紀の神話の記載に「高天原の高皇産靈尊は、葦原中国の鬼どもを退治する為に、天稚彦に天羽羽矢（アマのハハヤ）を持たせて地上に派遣された」とある。一般には、ヤジリに石鏃を使用していたが、天孫族は銅鏃「ハハヤ」（銅鏃の矢）だと云っているのだ。

弥生時代には、倭国ではまだタタラ製鉄が出来なかったが、銅冶金は各地で盛んであった。だから銅の取れる「ハタ」の地名は各地にあり、そこで銅を採っていた。火山国倭国には各地に銅鉱石があったのだ。

3 「源ハタ氏」の発音と「秦」

後には「備後」「備中」「備前」と呼ばれたが、広範囲の吉備地方を初めて支配した部族は、銅冶金で支配権を得た「源ハタ氏」だと推定できる。その部族は、現中国から朝鮮半島を越して来た「漢民族」ではなく、黒潮に乗ってたどり着いた弥生人の南方民族だった。

理由は簡単、単語の中には「淀ヨド」「笠カサ」の様に【ド（銅）をヨ（溶かす）】【サ（砂鉄）をカ（火力で溶かす）】の、日本語文法にない漢語文法の単語はあるが、日本語の文法は、主語+目的語+動詞で構成されている。言葉を支えた（指示した）支配者（天孫族）は漢民族ではなかった。

日本の南方（黒潮の源流）と云えば「インドネシア」「インドシナ」の地がある様に、そこにはインドの影響がある。倭国に来た宗教と云えば「儒教」「道教」「仏教」が主だが、そればかりではなく「ヒンドゥー教」もある。インドからインドネシアに伝わり、黒潮に乗って倭国に来ている。

地名はその理由があって呼ばれるようになったのだから、ハタと呼ばれる地名も字からではなく、発音から地名解明をせねばならない。

よく間違っって説明されているのは、「秦氏」は、紀元前221年の秦始皇帝の末裔が、弓月君の時（5世紀）に日本に来た一族だという。【新撰姓氏録の秦忌寸】……このことを後世大事にするハタ氏が、ハタを「秦」と書くようになる。

4 総社のハタ氏と天孫族

総社では、5世紀ではなく、弥生時代からハタ氏が居たことが説明できている。……即ち、総社の伊予部山の弥生時代の磐座を祭祀していた秦原の人々が居た。彼らの中から素晴らしい権力者が出て来て、広範囲を支配するようになった。

その支配者のお墓が、弥生時代最大のお墓・楯築墳丘墓として日畑に築造され祭祀された。

その後、天孫族が九州から東征して来た時、彼らの末裔の一部は、一緒になって大和に移って天皇家（天孫族）を支えた。

7代孝霊天皇の皇子（彦五十狹芹彦命）は、吉備の支配者に任命され独身で赴任し、吉備のハタ氏の娘を娶っている。12代景行天皇は吉備の稲日大郎姫（イナビのオオイラツメ）を皇后にされ日本武尊が生まれる。14代仲哀天皇は日本武尊の第2子で、15代応神天皇は仲哀天皇の第四子。その15代応神天皇は兄媛を追って吉備の足守にいられているし、16代仁徳天皇は吉備の黒日売を追って吉備に、21代雄略天皇の妃の一人に上道臣の稚媛がいる。吉備と天皇家との関係は深い。

その関係は、続いている。神武天皇東征の際、吉備のハタ氏と一緒に大和に乗り込んだ時から続いている。その関係を示すものが埋葬祭祀である。

総社のハタ族は、少し東の日畑（ヒ・ハタ）に、当時としては日本一大きいお墓・楯築墳丘墓を築造し、その上に特殊器台と亀石を置き、被葬者を護る。

楯築墳丘墓より少し古い時期、備後の三次で「四隅突出型墳丘墓」が造られる。このお墓は仏教ではなく、「ヒンドゥー教」の流れをくむ人たちだった。ヒンドゥー教は、①東から西に向かって参拝②亀が守護する。この流れの人達が総社のハタ氏で、楯築墳丘墓を造り、お墓の上に亀石を祀ったし、お墓を護る集落（日畑）をお墓の東側に作った。

九州から東進してきた天孫族は、そのハタ氏と共に奈良に入り、前方後円墳の古墳を造り、その上に特殊器台を変形した埴輪を並べる。吉備（ハタ氏）の祭祀をそのまま伝承している。

天皇家が仏教を信奉し始める。33代推古天皇の命で、秦河勝が蜂岡寺を創建した。河勝は、昔秦原から出た一族の成功者だから、河勝が故郷の秦一族にも同じ様に仏教を信仰し、お寺を創建する様に命じた。建てられたのが「秦原廃寺」。その時、秦原の人たちは、磐座信仰も続けていたから、伊予部山磐座の真北・正木山磐座の真東の土地を選んで寺の塔を建てた。（だからこの秦原廃寺は日本でも最古級のお寺跡と云われている。）【秦原廃寺を発掘調査すれば、日畑廃寺の様に、正門が東にあるお寺だった可能性はある。】

総社のハタには、南に「伊予部山の磐座」、北に「石畳神社の磐座」が、西の正木山の山頂には「麻佐岐神社の磐座」がある。しかし山頂が「ハタ地名」だと云え、山頂から南側は久代、北側は福谷に属している。山頂のハタ地名の麻佐岐神社の磐座には、東麓のハタから尾根を西に進んでお参りする。（今は車道が福谷の方から通じているが）

ハタ住民の祀る麻佐岐神社（磐座）のご祭神を「大国御魂神」とされているが、この神

様は天理市の「大和オオヤマト神社」のご祭神だ。日本書紀によれば、『この神様は、垂仁天皇の時まで宮中で二柱の神を祀っていたが、宮中での不具合により二柱とも宮中の外に出されたという』今一柱は伊勢の内宮（ご祭神は天照大神）に、一柱は天理の大和神社（ご祭神は大国御魂神）に祀られた。

この大国御魂神がハタの麻佐岐神社の磐座のご祭神でもある。総社のハタ氏は天孫族と一緒に大和に侵攻し、大和で一緒に初期祭祀を行っていた。

これらを総合して考察すれば、弥生時代から古墳時代にかけて、総社のハタに居たハタ氏は、間違いなく天孫族と一緒に我が国を建国していたことが理解できる。

5 弥生時代から居た「源ハタ氏族」の東征

秦原の立派な磐座「伊予部山の磐座」もハタの人にとっては大切な神様だ。

天孫族東征に同行した「ハタ氏族」の中で、後に、聖徳太子の取巻きに成っていた秦氏族の首長・秦河勝は、太子が四天王寺を建立した時、聖徳太子から仏像を頂いて蜂岡寺（太秦の広隆寺）を建てる。秦河勝は、祖先の居る出身地にも寺を建てる様に命じる。秦原地区でも、白鳳期に「秦原廃寺」（最古級）を建てることになるが、寺で一番大切なお釈迦様のお骨を納める塔（七重塔か五重塔）の礎石の位置を決める時、伊予部山の磐座を意識して決めている。

それまで「磐座信仰」の道教的宗教からの大変化で、仏教信仰になるのだが、礎石はそれまでの伊予部山の磐座を意識して、その真北に礎石の場所をきめている。弥生の伊予部山を意識していることから、秦原に居る「ハタ氏族」は、応神天皇の頃（5世紀）に渡来して来たのではなく、弥生時代から居たことが検証出来た。

東征に同行した総社の「ハタ氏族」の一派は、奈良の北部・京都府の南部（綴喜郡・相楽郡辺り）に盤踞していた。その蟹幡郡（カムハタ）郷（現在の綺田）（カムハタはハタ氏族の居た場所）にある前期古墳「椿井（ツバイ）大塚山古墳」からは、25種類の鋳型で鋳造した同範鏡の三角縁神獣鏡が出土した。三角縁神獣鏡が出土した当時は、魏志倭人伝に書いてある「卑弥呼が頂いた100枚の鏡」だと云われていたが、今では三角縁神獣鏡が500枚も出土しているから、別の考え方（説）が示されている。その説の一つが、精銅技術者ハタ氏族が造った鏡だと云う。

その同範鏡は各地で出土しているが、吉備でも旭川左岸に築造された前期古墳の前方後方墳「備前車塚古墳」（麓に土田（ツチダ）（ハタとも読める）や、高梁川右岸の秦に築造された前期古墳の前方後円墳「上沼古墳」から、数は少ないが「椿井大塚山古墳」から出土した鏡と同じ鋳型で造られた三角縁神獣鏡が出土している。共通点は「源ハタ氏族」が居る地域だ。大分県宇佐市の畑田（ハタケダ）には、同範鏡を出土した「赤塚古墳」もある。

ハタ氏に就いては、記・紀では応神天皇の頃（4世紀末～5世紀始め）にハタ氏族の祖・弓月（ユツキ）君が来たとしている。また、仁徳天皇の時、ハタ氏族が献上した絹織物が

肌にすべすべして気持ちがよかった故に波陀（ハダ）の姓を賜ったと記載してある。しかし、秦地区には弥生時代から「源ハタ氏族」が居たのだ。

6 ハタ氏は備後から備中、大和へ

彼らはどこから来たのか。文化は西からというが、多分広範囲な吉備の西部、備後からではないか。

備後に三次市がある。その陣屋地区で弥生時代中ごろに「四隅突出型墳丘墓」の文化が生じた。詳細な説明は譲るが、四隅突出型墳丘墓はヒンドゥー教地域の文化だ。ヒンドゥー教の三大特色は、①寺院は東から西に向かつて参拝する。②亀がヒンドゥー教を護る。③日本ではヒンドゥー教の神々を「〇〇天」と称し、仏教の中で祀る。

四隅突出型墳丘墓は、備後から日本海側に下りて発展する。そのことが数百年も引き継がれて、出雲の神社には「社紋に亀甲紋」が多い。（ヒンドゥー教の亀の影響だ。）又、「本殿が東向き」が多い。

備後から備中に移動した「弥生時代のハタ氏族」は、当然秦原地区で力をつけ、少し西の日畑（ヒ・ハタ）で、当時日本最大のお墓・「楯築墳丘墓」を築造し、それまで何処にもなかった「特殊器台」をお墓の上に捧げた。出土した特殊器台は、吉備独特のものとは云え、出雲の四隅突出型墳丘墓の上にも置かれていた。出雲族と吉備族とが同族で同文化を持っていたことが判る。

備後から備中に移動した「弥生時代のハタ氏族」は、ヒンドゥー教の教えを譲り、楯築墳丘墓では、東からお参りする様に墳丘墓を護る集落を東側に作った（日畑集落）。

そして墳丘墓の上に「亀石」を置き被葬者を護らした。

楯築墳丘墓の上の特殊器台は、後に前方後円墳の上の埴輪となる。それは、天孫族の東征と共に大和に攻め込んだ「ハタ氏族」の影響力があったからだ。

東征した「ハタ氏族」は天孫族と共に、当分の間「祭政」を共有していたといえる。

〈参考〉

楯築墳丘墓



所在地	岡山県倉敷市矢部
形状	双方中円墳
規模	両端72m 墳丘直径50m
築造年代	2世紀後半－3世紀前半
出土品	鉄剣・首飾・ガラス玉・小管玉
史跡指定	国の史跡「楯築遺跡」
特記事項	全国最大規模の弥生墳丘墓

古代日本巨石文明熟成の地か？

～麻佐岐神社・石畳神社磐座幻想～

磐座(いわくら)学会会員・精神科医 高木 寛治

私は、ふとした縁で、30代の末から『石』の魅力にとりつかれ、我家の近くを流れる高梁川の河原で石拾いを楽しむとともに、石に関するあらゆる本を収集することを生きがいとしてきた。また、石と人との関係に関する随筆を書くことも習慣になり、これまで還暦記念として10編からなる石の随筆集『石と在る』古希記念に12編を収めた『石に学ぶ』を自費出版して来た。また、現在、書き続けている未完の「総社の磐座」シリーズを完結させて、数年後の喜寿記念に『石を祀る』として発行出来ることを夢見ている。

私の磐座との出会いは、本書の執筆者の一人、佐藤光範氏の『磐座～古代祭祀跡 吉備の磐座～』という、岡山県内の代表的な磐座101カ所を紹介した本を、平成11年3月、岡山市内のある古本屋で見つけた時である。総社市内のものは8カ所で、当然、麻佐岐神社・石畳神社の磐座は含まれている。その本に導かれ、細々と磐座巡りをしていたが、偶然インターネットで『イワクラ（磐座）学会』の存在を知り入会したのは平成18年8月である。早速案内のあった奈良県山添村イワクラツアーに参加して、そこで佐藤氏と面識を得、氏が主宰されておられる磐座探訪（毎月第3日曜日）の『星と太陽の会』にお誘いをいただいて、今日に至っている。

この、『イワクラ（磐座）学会』と『星と太陽の会』での磐座探訪によって、わが国には、世界の中でも特筆すべき『磐座』を核とした古墳、石庭等の巨石文明があったという確信が、私の心に芽生えてきた。中でも、岡山県の磐座の数の多さは、群を抜いているように思えてしかたがない。おそらく数百カ所以上あるのではないだろうか。佐藤氏は、“ハタ氏”と“銅の生産地”と“磐座”と“地名”の関係に注目しておられるが、岡山県には、他に黒住秀雄氏、八木敏乗氏、薬師寺愼一氏等先駆的な在野の磐座探究者も多い。その方たちと交流があり、総社市の秦地域を古代吉備国発祥の地ではないかと磐座を中心に思いを巡らし活動してこられたのが、前の麻佐岐神社・石畳神社等の宮司・故小橋光一氏（明治45年2月19日～平成13年10月9日）である。

『古代の麻佐岐山を探索会』という組織を運営されていたらしい。残されている麻佐岐神社磐座の周辺石組の図面は、ぜひ生かしていただきたいものだ。

さて、前記したように、私は有志で年2回発行している総社の地域誌『然』に「総社の磐座」シリーズを連載し、これまで2007年秋号に総論的な話を載せてから、以来「正木山の磐座」、「石畳神社の磐座」、「伊与部山の磐座」、「木村山の磐座」、「新本の石鎚神社の磐座」、「秋葉山の磐座」、「稲荷山の磐座」、「三輪山の磐座」、「宿（山手）の磐座」、「福山の磐座」を書いてきた。今後、さらに、総社宮、長良山、庚申山、高滝山、豪溪、鬼城山、

岩屋、犬墓山、狸岩山、日羽等の磐座を取り上げる予定である。これだけまとまって周囲の山々等に巨石の磐座が存在するのは極めて珍しいのではなかろうか。隣接する周辺市町村にも多数存在するのである。特に、吉備の中山山上の磐座、山手の東南にある楯築遺跡のストーンサークル的な石組、その南の日畑（ハタ）地区の岩倉神社の驚くべき巨石群等は、ぜひ見ておいていただきたい。しかしながら、何といても古代さながらに神石として岩を祀り続けている秦地域は貴重である。古代の遺産・精神を大切に守り続けているとも言え、誇るべきことである。これだけ長期にわたって傳承してきているのには、きっと、それなりの理由が存在している筈である。

私は、一昨年、宮崎県日向市であったイワクラ学会総会に参加し、様々な遺跡や磐座等を実見して神武東征の存在を信じる事が出来るようになった。この時の私のレポートを、イワクラ学会会報の26号（2012年12月）に掲載させていただいている。神武天皇は、各地のハタ氏族等を結集しつつ力を蓄え、東へ東へと向かって行ったと思われるが、当時、ハタ氏族等が基盤となって大きな力を有していた巨石文明の吉備国では、特に、最も長い年月をかけて融合していかなければならなかった。これ以後、大和と吉備国は愛憎半ばする関係が続いていくことになり、ついにはその強大さゆえに、大和の歴史から軽んじられていくことになったのではなかろうか。

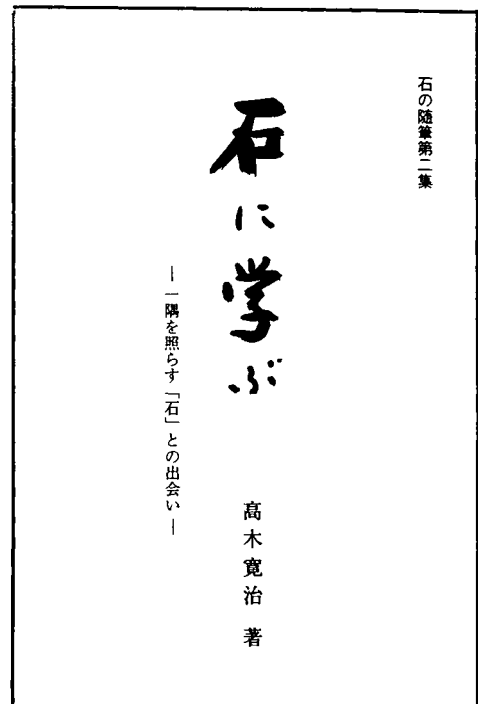
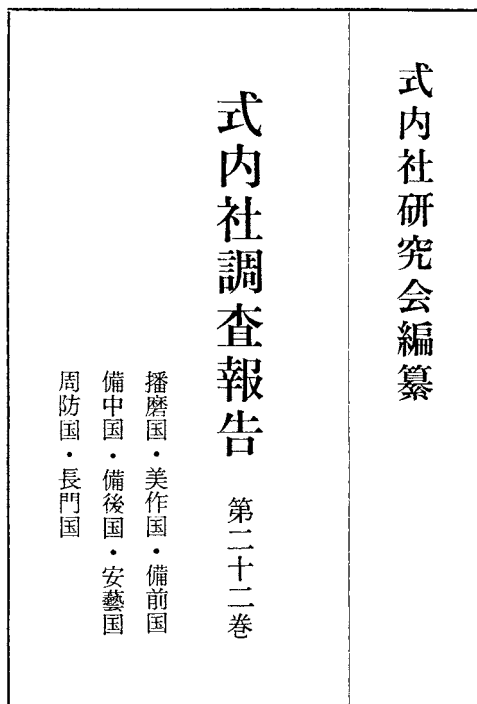
最後に、「秦歴史遺産保存協議会」への期待というか、お願いを書いて終わりにしたい。それは、正木山と、それに連なる鍵山の巨石と石組み遺跡の全貌の解明である。現在は樹木に隠れて、古代に祀られていたかもしれない数多くの岩が眠っていると思われるのである。『然』の2011年春号（18号）に載せた「大石に囲まれ守られている総社」と、2012年秋号（21号）の『正木山の磐座』後日談」に記した内容の一部を紹介しておきたい。前者では、姫社神社背後の神体山とも思われる岩山の“あぶらだけ（油岳？）”と、鍵山の東側の中腹に多数存在している巨石群について書いている。姫社神社近くに住む、中学時代の同期生板野勲氏が、「こうご石」と呼ばれている岩があると教えてくれたので、佐藤光範氏も一緒に探訪したのであるが素晴らしい巨石を沢山見ることが出来た。しかし、草木が繁り、道なき道となってしまう山の斜面での大変な探訪であった。ただ、「モアイ像岩」とでも名付けたくなくなったすごい巨岩との出会いは、圧巻であった。疲れも吹き飛んだ。『こうご石』であるが、大著『古代巨石文化の研究（吉原博見 白帝社1982年11月刊）』によると、全国に“こうご”という地名で当て字されているものには、神籠、降居、神子、上籠、紙子、皇子、王子、向居、向後、幸後、幸子、教子、甲子、甲後、高後、高口、荒子、豪士、庚午、香合、香河、香子、香護、皇后、寒古、神後、皮籠、革籠、等があり、祀られた大石と関係を有するものが多いとのことである。吉原氏は、著書の「はじめに」の中で「神籠石の研究は全面的に古代神道の研究である。そうしてそれは、現在古代信仰と云われているものよりも、更に古代のものであって、見方を変えれば、高天原天上思想発生の前後にまたがるものであり、又神社建築発生以前のものである。従ってそこには古代祭祀の原則が示されている。（中略）今日正しい理解に基づく古文化財として指

定されたものは、何処にも見当たらない。それというのも、神籠石と時代又は世人との断絶がもとである」と記している。

後者では、総社高校1年後輩になる久代の三上薫永氏の活動について書いた。氏は、麻佐岐神社から正木山の尾根を西にしばらく行ったところに磐座的な立派な石組をはじめとした多数の大石群を発見されたのである。また、神社の敷地と思われる石垣や、石の祠も数多く見つけておられる。正木山は全山に、もっともっと多くの聖地の遺産が眠っているのではなかろうか。「秦歴史遺産保存協議会」が、声をかけて正木山の周囲の全地区が協力しあって、聖地としての遺産を出来るだけ多数明らかにし、整備していただきたい。

参考文献

秦の石畳神社、麻佐岐神社については、下記の式内社研究会編纂の「式内社調査報告」（第22巻）の「備中国」に詳細が記載されています。



(332ページの本)

福谷の「姫社神社」について

姫社神社総代 板野 勲

1 姫社神社をめぐる「なぞ」

総社市福谷の姫社神社については、古事記、日本書紀、風土記などに「ヒメコソ」の名が出てくる由緒ある神社である。当地では古くからの伝承もあり、新羅との関係も深く、秦歴史遺産保存協議会も大きな関心を寄せている。

この姫社神社については、京都大学の上田正昭名誉教授の研究などでその概要を把握することができ、単なる伝承ではないことは理解されているが、依然として、よく尋ねられる「なぞ」の部分もある。一例をあげると、次のとおりである。

- ①古事記応神天皇の段によると、新羅の王子の天日矛（アメノヒボコ）が美人の妻を追って日本に渡来したが、姫（妻）は、難波（現在の大阪）に逃げたとある。当地の姫社神社の御祭神は比売語曾神（ヒメコソノカミ）＝阿加流比売（アカルヒメ）であるが、本当に当地福谷と関係があるのか？
- ②姫社神社のある福谷（字福中）は、付近に「和名抄」にいう秦原郷があるが、はたして渡来人の「秦氏」と関係があるのか？
- ③製鉄の神を祀っていると伝承されているが、物的証拠が福谷地区に明確に残っているか？製鉄の神を祀っている根拠は？
- ④式内社とはなっており、元々の創建時期は、いつごろか？

以下、これら「なぞ」の解明について所感を述べ、今後の研究や調査に期待しつつ、以下新羅の製鉄の神を祀る姫社神社がこの地に鎮座している背景や意義について言及してみたい。

2 御祭神「阿加流比売（アカルヒメ）」は当地に？

御祭神の比売語曾神（ヒメコソノカミ）は、阿加流比売（アカルヒメ）とも呼ばれ、新羅の国から渡来して来たという新羅の王子・天日矛（アメノヒボコ＝天日槍とも）の妻である。古事記、日本書紀に出てくる天日矛は、一族とともに渡来し、但馬、播磨を中心に鉄器文明を広げたことから、但馬などには天日矛（天日槍）を祀る神社が多いという。それが事実なら、古事記や日本書紀には当地のことは記述されてないことになるが、但馬や播磨に近い吉備の国ゆえに、天日矛の妻の阿加流比売かその有力な関係者が当地の福谷に立ち寄ったことも想定され、姫社神社がこの福谷の地に存在するとみるのが自然である。古代吉備の国は、秦氏や一丁塚古墳群に代表されるように、この地の秦、福谷周辺を製鉄技術をはじめとする先進的文明の拠点としていたからこそ、この福谷に製鉄の神を祀った姫社神社が存在するとの説明には、説得力がある。姫社神社の境内地周辺から、製鉄の痕

跡として砂鉄状の塊「鉄滓（てっさい）」も出土している。

3 秦氏との関係？

古代吉備の国は、渡来人秦氏の製鉄、機織り、土木技術などで栄えたといわれており、天日矛は、朝鮮半島から製鉄技術を伝承したといわれることから、秦氏との関係が濃厚となる。とりわけ秦氏は新羅から渡来したという説も有力とされているから（薬師寺慎一編著「吉備の古代史辞典」）、なおさらのことである。

さらに近くの秦地域にある「秦原廃寺」は、仏教を伝来させた秦氏の建てた日本最古のお寺とも考えられるだけに、この付近の地理的状況から見て、姫社神社も秦氏との関係が濃厚と云える。

特に、高梁川の西岸、新本川流域は、弥生時代から銅冶金が行われており、金子や福谷にも銅採掘の痕跡があり、秦原郷には製鉄関連の遺跡が点在しており、技術集団の秦氏は、天日矛や阿加流比売を崇拝していたといわれていることとも符合する。

秦氏が現在の京都・大和に勢力を伸ばす前に、高梁川西岸で大きな勢力を持ち、古代吉備の国を形成する一大文明を築いていたとすれば、新羅の王子やその妻と何らかのかかわりがあったとしても不思議はない。秦氏については、謎の部分が多いが、大和岩雄先生の「秦氏の研究」「続 秦氏の研究」（大和書房）を始め、多くの古代史研究者がその実態解明に努めているところであり、秦歴史遺産保存協議会が秦の遺跡と同時に秦氏とのかかわりに注目して当地での活動を推進されていることは、心強い。

4 姫社神社が「製鉄の神様」を祀っている根拠？

新羅の王子やその妻が本当に製鉄技術を持ち込んでこの地に来たのか、そしてこの地域の住民に崇められ、現在の福谷で神社まで建立して顕彰され、祀られるほどの存在であったのか。伝承とはいえ長い歴史の中で製鉄の神ということは語り継がれ、揺らいでいない。間接的な補強証拠は近隣に多数存在する。

この姫社神社から南西にある水島機械金属工業団地西団地の造成で7世紀頃の製鉄関連遺跡も発見されており、新本川の対岸には6世紀前半の砂子遺跡、さらには久代地区藤原遺跡などこの付近は秦氏の製鉄に関連した遺跡も多い地域といえる。福谷地域からは、鍵山、正木山と二つの山を隔てており、実際に福谷地域に姫社神社を建てた理由は、境内地周辺から製鉄の痕跡ともいえる砂鉄状の塊「鉄滓（てっさい）」が出土しており、この福谷地域に決定的な製鉄の跡等が隠されているとも推測され、今後の調査研究、物的証拠の発見が期待される。

いずれにしても日本に数社しかないといわれる女性の比売許曾神を祀る当地の姫社神社であり、大陸から革命的な製鉄の技術が当地に持ち込まれたとすれば、地元民が感謝の念で奉ることも容易に想像できる。まして、秦氏が天日矛や阿加流比売を尊敬していたとすれば、秦氏が秦原郷の福谷の地に製鉄の神である姫社神社を建立したことは、当然のこと

と考えられる。「この福谷の地に、なぜ新羅の製鉄の神を祀った姫社神社があるのか？」と来訪者によく尋ねられるが、以上のように答えている。

この姫社神社の入り口に「古代吉備国波多波良郷鉄造之神社」「秦郷鉄造之発祥之地」の標識が建てられているが、地元の方々の以上のような理解と長い間のお祀りの継続、伝承を踏まえたものといえる。

5 創建の時期？

前述の京都大学の上田正昭著「東アジアと海上の道」によると、当地で見た天文年間（1532年～1554年）の古文書で、天文元年以前にすでに姫社祭りが行われていたことが記載されていたとのことである。現存する最も古い物的証拠かもしれないが、新羅の天日矛と云えば、さらに千年以上昔の話である。

この姫社神社の創建の時期は、不詳であるが、祀られている阿加流比売は天日矛により新羅の国から追いかけられた妻とすれば、応神天皇の頃となる。天日矛の日本への渡来は、筑前国（高祖神社）、筑後国（媛社神社）、豊後国（比売語曾社）、摂津国と足取りが残っているという。秦氏が九州から大和に勢力を伸ばす途中、吉備の国の当地に立ち寄ったとも推測される。秦原の製鉄の遺跡が6世紀～8世紀のものとすれば、姫社神社の創建も応神天皇の時代以降から8世紀ころまで遡る可能性があり、その後何度か建て替えられたといえる。

なお、現在の本殿の屋根は平成7年に銅版で葺き替えられ、拝殿は平成3年に改築された。毎年、地元氏子により、春祭（5月13日）、秋季大祭（10月第2土、日曜日）、新嘗祭（11月30日）が行われている。

以上、当地の姫社神社について、今後製鉄跡の調査、発見や付近の多くの古墳の発掘調査などから、秦氏との関係など多くの「なぞ」が次第に明らかになってくるものと期待している。この記述が姫社神社に関心を寄せられる多くの方々の共感とご批判を経て、より史実に忠実に、少しずつロマンのバールがはがれる日を楽しみにしている。



姫社神社への地図



姫社神社附近から出土の砂鉄状の塊「鉄滓（てっさい）」
※「鉄滓（てっさい）」とは、鉄を作る時の鉄のかす。
「カナクソ」ともいう。

随想「湛井堰と秦氏？」

秦歴史遺産保存協議会会長 板野 忠司

1 築造の起源は平安初期？

秦歴史遺産保存協議会として、あまりにも身近にありすぎてその存在価値を忘れている湛井堰（たたいぜき）について、地元の歴史遺産としての観点から先輩方の所説を紹介しつつ、秦氏との関係がどうなのか考えてみたいと思います。

高梁川の総社市秦と井尻野を堰き止めて約5000ヘクタールを灌漑する「湛井十二箇郷用水」、これは江戸時代の十二ヶ郷（刑部郷、真壁郷、八田部郷、三輪郷、三須郷、服部郷、庄内郷、加茂郷、庭瀬郷、撫川郷、庄郷、妹尾郷）地域を灌漑するためでした。しかしこの湛井堰は、江戸時代に建設されたわけではなく、建設の起源の詳細は不明ですが、平安時代のはじめに遡るとのことです。その根拠に大嘗会和歌集（鎌倉時代後期）の天慶9年（946年）の解説者（大岩徳二氏）によると「湛井」（「財井」）のことがでてくることなどを挙げる研究者もいます。その後平安時代の末期の1182年、平家の武将である妹尾兼康がすでにあった湛井堰を改修したと伝えられております。この湛井堰を見下ろす権現山の山腹には、守護神の井神社と妹尾兼康を祀った兼康神社があります。また現在の岡山市立鯉山小学校に隣接した一角に妹尾兼康を供養する宝篋印塔が建てられています。

現在の場所に湛井十二箇郷用水堰ができる以前は、さらに600m（700mとか1km説もあり）下流の井尻野「六本柳」に取水の堰があったとのことで、古代の高梁川には秦から東に左折し足守川に向かって分流する河道があり、その分岐点付近に堰が設けられ、古代の川筋を利用して三須、服部方面に向かって用水路がつくられたと推察されます。この湛井堰は、寿永元年（1182年）妹尾兼康の目論見によって築造されたという「兼康築造説」もありますが、高梁川の分岐点付近の「六本柳」にあった堰を上流の「湛井」に移し、樋門を設置し、堰を「改修整備」したという見方が有力のようです。中世の歴史資料が少ない中で、天正12年（1584年）には、少なくとも上流の現在の位置に築造されていたことは確かのようなのです。いずれにしても「六本柳」の堰の建設の起源は、平安時代初期にまで遡ると考えられているのは、当時堰を修理する費用を国が支出したという記録が残っていること、服部郷図という古代の服部地区を描いた絵図に用水路が描かれていることなども根拠となっているようです。

2 湛井堰と秦氏？

では、この湛井堰を最初に築いたのは、だれでしょう。古代吉備の研究者である薬師寺慎一先生によると「最初に湛井堰を築いたのは、高梁川西岸の総社市秦に住んでいた秦氏と考えられる。」（「吉備の古代史辞典」250ページより）とのこと。その理由は、秦氏

は井堰を築造する優れた土木技術を持って渡来してきたこと、京都の嵐山の麓に住んでいた秦氏が桂川に同じような構造の井堰を築いていることが挙げられます。この湛井堰は松の木丸太で作った底枠を川底に沈め石を詰め、その上に上枠を置いて石を重ね詰めていく独特の方法で、毎年季節により用水が不要となると濁水や土砂を流すために井堰の一部（数十メートル）の積み石を撤去し高瀬舟等を通し、再び灌漑期には石積を行う等により調整していました。この湛井堰だけでなく、秦氏が渡来した時期（4～5世紀）以降、秦の地域には、磐座信仰で有名な秦氏と関係が深いと考えられる麻佐岐神社や石畳神社をはじめ、新羅の製鉄の女神を祀った姫社神社、秦氏の土木技術を生かした60基を超える古墳築造、付近の製鉄の跡地など、秦氏の活躍を推測させる史実が数多くあります。秦氏は技術集団と言われますが、古代吉備の国に古墳や井堰築造の土木技術のほか製鉄、養蚕・絹織物など革命的な技術をもって波来したといえ、湛井堰もその一角にあると見るのが自然でしょう。

3 高梁川の流れの変化？

高梁川は、大昔は大きく東に曲り現在の総社市街地を通り、足守川や妹尾川と合流していたとのこと。現在の総社市中原は左岸にあります。古地図では上原、中原、下原と右岸にあったとのこと。もちろん高梁川が秦地域から真備、船穂や玉島方面にも氾濫し、むしろ秦の先は海に注いでいたとも考えられます。高梁川の本流又は分流が秦から東の現在の総社市街地方向に流れていた当時は、湛井堰による灌漑は不要であったと思われます。つまり、高梁川が現在のように水島・玉島に向かって南にまっすぐに流れるようになったため、高梁川を堰き止め、総社・足守・妹尾など十二箇郷地域を潤す必要が出てきたとも考えられます。高梁川の分流が総社、足守方面に流れていたとすると、分流に十分水が流れなくなって湛井堰を造り、旧分流水路を利用して用水を確保したとも考えられます。高梁川の流れがいつ現在のように変わったのか、その時期は定かではありませんが、稲作の始まった弥生時代以降、高梁川が氾濫し、足守川の方に流れず、南の倉敷・船穂の方に向かって流れることになってから、それ以後「湛井堰」による用水が必要となったと考えられます。この判断は、聡明な読者の皆様にご助言を賜ればと思いますが、いずれにしても、この湛井堰の築造は、流れの変化に関係し、稲作が始まった後、ほぼ秦氏が渡来し活躍する時期と重なるのです。

4 湛井堰あるも水利権の無かった秦？

「水を治める者は国を治める」（中国古代の春秋時代、斉国の宰相である管仲の桓公への発言）と言われたように、農耕民族である我が国においてその基本は変わっていません。湛井堰による灌漑で恩恵を受ける十二箇郷地域の人々は、この湛井堰による水利権の維持、確保に必死で、高梁川の下流地域や秦地域との水利権の争い、高瀬船の航行問題などで激しい争いをしてきたのです。特に秦地域は、今でこそ水利権により高梁川からポンプアッ

プによる池への取水が行われていますが、以前は湛井堰の右岸に位置しておりながら高梁川の水利権をもたず、水田は雨水による池が頼りであったのです。しかも、高梁川の堤防は、現在と違い貧弱で、秦地域はいわば高梁川の氾濫源でたびたび洪水の被害を受けております。石畳神社は高梁川の氾濫、洪水からの被害が生じないように祈禱するための神社であったと伝えられています。もともと秦に水利権がなぜ無かったのか不思議ですが、以前は水田でなく桑などの畑作が多かったためではないかと推測されます。しかし、秦において畑地を水田にする開発が進むにつれ、高梁川から秦地域への取水を試み、水車の設置、掛溝の設置などで十二箇郷地域とたびたび紛争を起こしてきました。記録によると、天明5年11月には、毎年池の水が不自由で、茶臼嶽の下に水車を設置し取水することについて、上秦村惣百姓代、上秦村五人組頭、上秦村名主等が連名で「上秦村役人連署請書」（嘆願書）を加茂村庄屋団次郎あてに出しています。いわば、嘆願書による陳情行政です。すぐそばを高梁川が流れ、湛井堰が設置された秦であるにもかかわらず、水利権もなく水不足が深刻な状態で悩んでいたのです。秦にため池が多いのも、うなずけます。秦氏も妹尾兼康も湛井堰のある足元の秦地域には薄情であったのでしょうか。いや、むしろ上秦・下秦というばらばらの村が、高梁川下流の十二箇郷という広域の村の団結に圧倒されてしまっていたのかもしれない。しかし、水を理由に秦の村人が暴力や一揆を起こした記録は見当たりません。もちろん現在では、水利権に基づき、石畳神社のそばの高梁川からポンプアップ等で取水されており、江戸時代のような水不足は解消されております。

5 まぼろしの湛井水泳場と秦氏の知恵

このように湛井堰と水利権についての幾多の変遷を経ながら、昭和40年4月に国営付帯県営灌漑排水事業の一環として総工費約五億円をかけて堤長295mの重力式コンクリート固定堰の高梁川合向井堰が完成しました。これにより秦氏以降千数百年の歴史を持つ木枠と石積みの湛井十二箇郷用水は、コンクリート堰と遠隔操作による油圧シリンダーピストン駆動式の近代的な樋門となり、水門調整もボタン一つで可能となりました。

しかし一方、毎年季節により手作業で部分的に石積みを増減し流量を調整していた当時と比べ、コンクリート設置により川底のヘドロが石の間から流れなくなり、県下唯一の淡水の「湛井水泳場」は、水質が悪化することとなったのではないのでしょうか。それまでは、遠浅で、透き通ったきれいな水と砂浜で親しまれていた「湛井水泳場」は、夏になると「秦水泳場開き」が行われ、何千人という大勢の若者や家族連れの水泳客でにぎわう盛況でした。飛び込み台や貸ボート、脱衣場などが整備され、氷菓子などの多数の出店が並び、多くの観光バスが押し寄せていたのが、まるで夢のようです。県下唯一の淡水湖の湛井水泳場は、高梁川合向井堰の完成と引き換えに消えてしまい、いつのまにか「ここでは泳げません。」という立札が立ちました。豪溪方面から迂回した高梁川の右岸中洲にできた自然の遠浅の砂浜が消え、「秦の夏」と誇っていた湛井水泳場の風物詩が消えたのです。

今更ながら、水質汚染、砂浜破壊を引き起こさなかった松の木枠に石積み、季節により

石積みの一部撤去という秦氏の湛井堰、その技術と知恵のすごさに、改めて驚きます。

6 次世代への期待

湛井堰の変遷をたどり、湛井堰の技術や水利権紛争や環境問題を振り返るとき、湛井堰の歴史に学ぶ教訓が鮮明に見えてきます。「文明は水で始まり、水で終わる」とのたとえどおり、湛井堰の果たす役割は重大です。「経済、エネルギー、情報戦争の次は、水戦争」と言われる時代、次の千年に向けて、湛井十二箇郷用水が地域の自然環境を保持し、地域エゴによる水利権の争いに終始することなく、歴史の検証に耐え、無事水戦争を乗り切っていくことを期待します。

（湛井堰についての詳細は、昭和51年7月発行の湛井十二箇所郷組合編「備中湛井十二箇郷用水史」（藤井駿・加原耕作共著）を参考）



現在の湛井堰十二箇郷用水

発 行

秦歴史遺産保存協議会

会 長 板野忠司
副 会 長 登森康郎 片岡裕平
事務局長 小橋武史
会 員 数 340名（平成26年11月）

入会案内
連 絡 先 片岡裕平 0866-95-8206
小橋武史 0866-95-8156

発 行 平成27年 1 月

